

アイム・ノット・ゼア

2008(平成20)年2月4日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督・脚本＝トッド・ヘインズ／出演＝クリスチャン・ペイル／ケイト・ブランシェット／マーカス・カール・フランクリン／リチャード・ギア／ヒース・レジャー／ベン・ウィショウ／シャルロット・ゲンズブール／デヴィッド・クロス／ブルース・グリーンウッド／ジュリアン・ムーア／ミシェル・ウィリアムズ（ハビネット、デスペラード配給／2007年アメリカ映画／136分）

……私が知っているボブ・ディランは「フォークの神サマ」だが、彼は同時にロックンロール史に輝くミュージシャン！ この映画では、今なお現役トップで活躍中のディランを、何と6人の俳優が6人のディランを演ずるという奇抜な試みを……。したがって、日本人には話がこんがらがってわかりにくいから、要注意！ ちなみに、アカデミー賞助演女優賞にノミネートされたケイト・ブランシェットは、一体どんな役を……？



こんな伝記映画、はじめて！

この映画はボブ・ディランの伝記映画。もっとも、レイ・チャールズの伝記映画『Ray／レイ』（04年）、エディット・ピアフの伝記映画『エディット・ピアフ 愛の讃歌』（07年）、マリア・カラスの伝記映画『永遠のマリア・カラス』（02年）、など既に死亡した有名歌手やミュージシャンの伝説を描いた伝記映画が数多いが、1941年に生まれ、66歳にしてなお現役トップとして活躍しているミュージシャン、ボブ・ディランの人生を記した映画を伝記映画と呼ぶのは不適當かも……？

それはともかく、私が「こんな映画はじめて！」と思ったのは、6つの顔を持つボブ・ディランを描くため、なんと6人の俳優がそれぞれの時代のそれぞれの顔のディランを演じていること。さらにびっくりしたのが、『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（07年）ではまさにヴァージンクイーンとしてもっとも輝く女性像を演じたケイト・ブランシェットが、なんと女性でありながらボブ・ディラン役に抜擢されていたこと！ さてそんな一風変わった趣向の映画の出来は……？

6人のボブ・ディランの第1分類は……？

この映画には6人のボブ・ディラン（？）が登場するが、それは大きく2つに分類できる。第1分類は時期ごと、ストーリーごとに割り当てられたもの。

まず第1に、60年代中期のディランをモデルにしたジュードを演じたのがケイト・ブランシェットで、これは「ロックスター」のディラン。第2に60年代初頭、ニューヨークのフォーク・シーンに登場した頃のディラン（ジャック）と、70年代の後半、再生派キリスト教に傾倒していた頃のディランという「ふたりのディラン」を一人二役で演じたのがクリスチャン・ベイル。これは「革命家」としてのディランだ。第3にディランの人生を語るうえで欠かせない60年代初期の恋人だったスージー・ロトロと最初の妻サラをモデルにした女性との危うい関係に苦悩するロビーを演じたのがヒース・レジャーで、これは「映画スター」としてのディラン。

6人のボブ・ディランの第2分類は……？

他方、ボブ・ディランの詩人、無法者、放浪者という3つの面を、実在した人物を含むキャラに投影させたのが次の3人。第1はディランの歌に秘められた数々の神話世界を象徴するビリー・ザ・キッドを演じたりチャード・ギアで、これは「無法者」としてのディラン。第2はオリジナルなスタイルを模索していたデビュー以前のディランを投影したウディを演じた黒人の子役俳優マーカス・カール・フランクリン。これは「放浪者」としてのディランだ。そして第3に、詩的な言葉で人々を幻惑する「象徴派詩人」としてのディランが重なる詩人アルチュール・ランボーを演じたのがベン・ウィショー。これは「詩人」としてのディランだ。

残念ながら知らない曲ばかり……

プレスシートによれば、この映画のタイトルとなっている『アイム・ノット・ゼア』（私はそこにはいない）は、公式には未発表の曲。しかし、トッド・ヘインズ監督がこの曲に詩人ランボーの「私はひとりの他者である」という詩節を想起して、タイトルとしたものらしい。またこの映画ではボブ・ディランの曲が30曲以上も使われているし、その歌詞はもちろん字幕に表示されている。しかし、1960年代後半に一世を風靡したプロテストソングとしてのフォークソング『風に吹かれて』をこの映画の

中で1度も聴けなかったのは私としては実に残念。ボブ・ディランにはその他『時代は変わる』など、1967年に大学に入学した私など学生運動に参加した人たちの「愛唱歌」がたくさんあるが、この映画で使われている曲が私の知らない曲ばかりだったのは残念……。

主演女優賞と助演女優賞のダブル受賞は……？

私はこの映画にケイト・ブランシェットが出演していると聞き、チラシ等で確認したが、当初どんな役なのか全くわからなかった。つまり、男っぽい服装で常時タバコを吸っているジュードの姿を観ても、それがケイト・ブランシェットが演ずる60年代中期のディランをモデルにしたものだとわからなかったわけだ。

したがって、そんなケイト・ブランシェットの熱演は明らかだから、この映画の演技で第60回アカデミー賞助演女優賞にノミネートされたことには十分納得。ところが、さらにビックリするのは、同じケイト・ブランシェットが女としての魅力をいっばいに強調した『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（07年）で主演女優賞にノミネートされていること。つまり、同じ年のアカデミー賞の主演女優賞と助演女優賞にノミネートという栄誉に輝いたわけだが、さてその結果は……？

「日本のボブ・ディラン」との比較は……？

1960年代後半の学生運動の活動家たちの「愛唱歌」は、洋版ではボブ・ディランの『風に吹かれて』やジョーン・バエズの『勝利をわれらに』、そしてブラザーズ・フォアの『花はどこにいった』だったし、日本版では岡林信康の『友よ』など。

ボブ・ディランは1941年生まれだが、その5年後となる1946年生まれの吉田拓郎は、1971年の『結婚しようよ』と、翌1972年の『旅の宿』が大ヒットして一躍有名となり、「日本のボブ・ディラン」「フォークの神様」と呼ばれた存在……？

たまたま佐々部清監督の『結婚しようよ』（08年）が2月2日から公開されており、これを2月10日に観た。この映画には吉田拓郎のヒット曲がてんこ盛り。もっともこれは吉田拓郎の伝記映画ではなく、彼のたくさんのヒット曲を懐かしく聴きながら、ある家族の絆を再確認することができるアットホームで心温まる映画だから、難解な『アイム・ノット・ゼア』に比べれば、単純でわかりやすい感動作……。さて、あなたのお好みは……？

2008(平成20)年2月11日記